

「第 25 回 奨励賞・功労賞」記念特別号

一般社団法人

日本女性科学者の会 NEWS



The Society of Japanese Women Scientists

No.127&128 Special Issue, 2021.3

I. 2021 年新春によせて

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に翻弄された2020年でした。あっという間に全世界に広がったCOVID-19は、我々の生活を一変しました。様々な式典やイベントが中止になり、講義はオンラインに、研究室は閉鎖になったところも少なくないと思います。経済打撃は極めて大きく、社会不安は企業倒産数や自殺者数の急増に反映されています。COVID-19が、男性より女性に大きな影響を及ぼしていることも見逃せません。詳細は内閣府男女共同参画局「コロナ下の女性への影響と課題に関する研究会」の報告書や緊急提言 (<https://www.gender.go.jp/kaigi/kento/covid-19/index.html>) をご参照ください。本会会員である女性研究者の生活にも大きく影響していることは、言うまでもありません。

コロナ禍でみえてきた課題を、新しい生活様式として改善する絶好のチャンスと捉え、意識改革・組織改革を推進する必要があります。皆が「変わらないといけない」と思っている今こそが、アクションを起こす好機です。例えば、大学の事務のアナログ

一般社団法人 日本女性科学者の会 会長 近藤 科江



なところは、これまでどんなにお願いしても変わることはありませんでしたが、コロナ禍にあって、有無も言わずデジタルトランスフォーメーション (DX) が推進され、「PDFをメール添付で送ってください」「押印を廃止します」など、信じられない対応が取られるようになりました。また、デジタル会議、リモート勤務、オンライン学会など、場所の移動を伴わない教育・研究・社会活動がどんどん進んで、「物足りなさ」や「取り残されている感」を持ちつつも、これまで場所(距離や大きさ)によって制限されていた大きなバリアがスッパリ取り除かれて、世界中の誰とでも繋がる空間的な自由を獲得した開放感を味わっています。1日24時間を何倍も有効に使う事ができるようになりました。これは、COVID-19以前にも出来たことでしたが、我々の意識はその事に価値を見出せませんでした。しかし、必要に迫られてやってみたら、思っていた以上の価値を見出すことができたと言えます。この流れは、COVID-19が終息しても変わることは無いと思います。一方で、空間を共有することに新たな意味や価値を見出すきっかけにもなりました。

本会として、女性研究者の支援や環境改善のために、この機を逃さずできることは何なのか? 何から始めるべきなのか? 日々のCOVID-19対策に追われて、これらの重要な課題に、まだ取り組むことができていません。今年は、2021年度理事候補者を決める選挙があります。開かれた会を目指して、今回は全員参加の選挙を行います。新体制がどのようなのかは、選挙が終わらないと分かりませんが、上記課題に取り組んで頂きたいと思います。

最後になりましたが、2019年度の選挙で会長を拝命してから、70を超える会長メールを配信してきました。会員の皆様から、励ましのメールを頂く事もあり、時にはご批判・ご指導を頂く事もありました。十分な活動が出来たとは言い難いですが、一歩でも前に進めたと思って頂けると幸いです。

目次

| | |
|--|----|
| I. 会長のご挨拶「2021年新春によせて」 | 1 |
| II. 第25回日本女性科学者の会 奨励賞・功労賞受賞者のプロフィール | 2 |
| III. 第7回定時総会報告 | 4 |
| IV. 第13回学術大会 第25回 SJWS奨励賞・功労賞贈呈式 | 4 |
| V. 奨励賞・功労賞受賞者挨拶 | 6 |
| VI. 令和2年度 文部科学大臣表彰若手科学者賞伝達式 | 8 |
| VII. 奨励賞受賞講演要旨 | 9 |
| VIII. 第13回学術大会 ZOOM同時開催 | 12 |
| IX. SJWS新春シンポジウム2021 | 13 |
| X. 第18回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム | 14 |
| XI. 2019年度会務ならびに事業報告、2020年度事業計画 | 15 |

第25回日本女性科学者の会
奨励賞受賞



坂田(柳元)麻実子氏
(SAKATA-YANAGIMOTO
MAMIKO)

44歳

筑波大学・医学医療
系血液内科・准教授
博士(医学)東京大学

研究課題：「T細胞リンパ腫におけるトランスレーショナルリサーチ」

賞贈呈理由：受賞者は悪性リンパ腫の一つである血管免疫芽球形T細胞リンパ腫（Angioimmunoblastic T-cell lymphoma：AITL）に高頻度にみられる遺伝子変異(G17V RHOA変異)を発見した。この成果は、悪性リンパ腫の世界的な分類方法に大きな影響を与え、さらに、G17V RHOA変異の検出法の開発を進めることで、AITLの遺伝子診断の実用化に大きく貢献した。また、G17V RHOA変異体の網羅的な結合蛋白解析によってAITL発症の分子メカニズムを明らかにし、これを標的とする臨床研究および医師主導治験を実現した。基礎研究医と臨床医という二つの特性を活かし、疾患の病態を明らかにするだけでなく、さらにはトランスレーショナルリサーチまで一気に実現した点は高く評価される。

略 歴：2000年3月 東京大学医学部医学科卒業
2000年5月～2003年3月 内科研修
2007年3月 東京大学大学院医学系研究科内科学専攻、博士課程修了
2007年4月 東京大学医学部附属病院医員
2008年7月 筑波大学附属病院医員
2008年11月 筑波大学大学院人間総合科学研究科講師
2011年10月 筑波大学医学医療系血液内科講師
2013年4月 筑波大学医学医療系血液内科准教授、現職
2019年4月 筑波大学学長補佐、兼任

連絡先：〒305-8575 茨城県つくば市天王台1-1-1 筑波大学 医学医療系血液内科
TEL：029-853-3127 E-mail：sakatama-tky@umin.net

第25回日本女性科学者の会
奨励賞受賞



服部 梓氏
(HATTORI N. AZUSA)

41歳

大阪大学産業科学研究
所 3次元ナノ構造科学
研究分野 准教授(PI)
博士(理学) 奈良先端
科学技術大学院大学

研究課題：「原子精度の立体造形技術による強相関金属酸化物のナノ相転移特性解明」

賞贈呈理由：強相関酸化物は相転移により自らの状態を劇的に変え、巨大かつ急峻な物性値の変化をもたらす。相転移の最小単位はナノ電子相であることが分かっていたが、その発生源解明への実験的なアプローチはほとんどなかった。服部氏は、独自の3次元ナノ構造創製技術を開発し、相関金属酸化物の物性起源であるナノ電子相ドメインの閉じ込め(隔離)を可能とし、単一ナノ電子相の金属-絶縁体転移特性の計測に成功した。そして、ナノ電子相の一次相転移特性、電子相の転移点分布を実験的に解明した。このナノスケールの物理現象の解明は、強相関電子系の相転移の本質に迫り、当該分野の学理構築および応用展開を可能とする重要な成果である。

略 歴：2001年3月 大阪府立大学工学部機能物質科学科卒業
2003年3月 奈良先端科学技術大学院大学 物質創成科学研究科 博士前期課程修了
2003年4月 奈良先端科学技術大学院大学物質創成科学研究科博士後期課程入学
2007年6月 同修了・学位取得。
(2004年4月-8月、2005年10月-2006年3月は出産・育児のため休学)。
2007年7月-2010年1月 大阪大学 工学研究科 附属超精密科学研究センター特任研究員
2010年2月-2019年7月 大阪大学産業科学研究所ナノテクノロジーセンター 助教
2015年10月-2019年3月 JSTさきがけ
「素材・デバイス・システム融合による革新的ナノエレクトロニクスの創成」領域研究者(兼任)
2019年8月-現在 大阪大学産業科学研究所 3次元ナノ構造科学研究分野 准教授(PI)

連絡先：〒567-0047 大阪府茨木市美穂ヶ丘8-1
大阪大学産業科学研究所 3次元ナノ構造科学研究分野
TEL：06-6105-6953 E-mail：a-hattori@sanken.osaka-u.ac.jp

第25回日本女性科学者の会
功労賞受賞



大島 範子 氏
(OSHIMA NORIKO)
73歳

学校法人東邦大学理事・
評議員、ダイバーシティ
推進センター顧問

賞贈呈理由: 大島氏は、29年間にわたり日本女性科学者の会の理事・監事を務められた。1990年度からの17年間は総務、賞担当あるいは学術誌担当理事として、2007～2010年度の4年間は会長として、そして2011～2018年度の8年間は監事として重責を果たされた。東邦大学では文部科学省「女性研究者支援プログラム育成」事業(2009年度採択)の実施責任者として、初代男女共同参画委員長・男女共同参画推進室長を務められたが、現在も顧問として活動されている。基礎研究にも力を注ぎ、「魚類の体色発現とその変化のメカニズム」の解明に取り組んでこられた。世界的に著名なだけでなく、「構造色(物理色)」に関する研究は産業界からも注目された。この間、多くの女子学生・院生の育成にも関わられた。大島氏が、東邦大学では初の女性理学部長に選出されたことは、このような教育・研究活動や、「日本女性科学者の会」を中心とした社会的な活動の実績が認知された証しといえる。

略 歴: 1970年お茶の水女子大学理学部生物学科卒、1972年同大学院理学研究科修士課程修了。1972年東邦大学理学部生物学科助手、1983年理学博士の学位取得(京都大学)。1984年東邦大学理学部生物学科講師、1988年助教授。1989年生物分子科学科(新設)に移籍後、1993年教授。2009～2011年度東邦大学理学部長、東邦大学男女共同参画委員長・男女共同参画推進室長。2013年定年退職(東邦大学名誉教授)。この間、日本女性科学者の会理事・会長、公益社団法人日本動物学会や日本色素細胞学会等の学会および学校法人東邦大学の理事・評議員等を歴任。現在、学校法人東邦大学理事・評議員、ダイバーシティ推進センター顧問。

連絡先: 〒274-0072 千葉県船橋市三山9-20-9
TEL: 047-479-1560(自宅)
E-mail: oshima@biomol.sci.toho-u.ac.jp

第25回日本女性科学者の会
功労賞受賞



森 義仁 氏
(MORI YOSHIHITO)
59歳

お茶の水女子大学
化学科 教授

賞贈呈理由: 森氏は、日本化学会男女共同参画推進委員(2004年～)、男女共同参画協会連絡会運営委員(2005年～)として男女共同参画推進活動に長く従事され、なかでも連絡会と国立女性教育会館の共同作業である「夏学」の運営実行委員(2005年～)、2007年には委員長を務められた。さらには、文京区の男女平等参画推進委員を務め(2006年～)、区の条例作成などに参画し、区内の幅広い世代の女性に対するサイエンスの紹介事業を行ってこられた。お茶の水女子大学では、学生と共同による理科実験サークルの運営(2003年～)、吉祥氏による「キュリー夫人の実験教室」での支援、お茶の水女子大学「ジェンダー研究」編集員(2008年～)など、精力的に活動されてきた。2002年のアフガニスタン開放以来、お茶の水女子大学の開発途上国女子教育協力センター長も兼任され、自身の研究室でも長期留学生を9名受け入れるなど、指導を担当された。以上のように、学協会、地域、大学などの様々な場で男女共同参画のための多大な貢献をされた。

略 歴: 1979年大阪府立大手前高等学校卒業、1983年徳島大学薬学部卒業、1988年北海道大学大学院薬学研究科修了、薬学博士、同年富山医科薬科大学附属病院薬剤師、1989年分子科学研究所技官、1995年名古屋工業大学工学部助手、1998年お茶の水女子大学助教授、2014年4月同教授、同年同大学いずみナーサリー施設長、2018年より同大学附属幼稚園園長を兼任して現在に至る

連絡先: 〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1 お茶の水女子大学理学部
TEL: 03-5978-5346 E-mail: mori.yoshihito@ocha.ac.jp

Ⅲ. 第7回定時総会報告

総会挨拶

一般社団法人 日本女性科学者の会 会長 近藤 科江

2020年度の総会は、昨年最初の非常事態宣言が出されている最中の5月24日に行われました。例年通り神田錦町にある学士会館で開催される予定でしたが、急遽Zoomを使ったデジタル開催を実施することとなりました。また、例年は総会後に行われていたSJWS賞の贈呈式を、COVID-19の状況が落ち着くまで延期することとしました。総会のデジタル開催というのは初めてでしたので心配しましたが、54名の参加者を得て、大きなトラブルもなく開催することができました。例年は関東ブロックの会員に多く参加頂いておりましたが、今回は他のブロック会員や海外会員の参加を得ることができました。例年の様な懇親会は開催できませんでしたが、総会後に意見交換を行う時間を設けて自由に意見を交換することができ、大変有意義であったと思います。デジタル開催の大きなメリットを感じ、今後場所を問わずに、会員の交流や活動の活性化に大きな力になると確信しました。対面での交流も大事にしつつ、より多くの会員が参加できる活動やグローバルな活動を広げていきたいと思っています。

プログラム

審議事項：

- 第1号議案 2019年度会務ならびに事業報告
- 第2号議案 2020年度会務ならびに事業計画案
- 第3号議案 2019年度収支決算と監査報告
- 第4号議案 2020年度予算案
- その他

報告事項

- 2020年度理事選挙について
- NEWS&HP委員会からのお知らせ
- 学術誌投稿規定等の変更について
- その他

第1号議案、第2号議案の概要はP15、P16に掲載しました。

詳細な内容は、会員専用HPのファイル「2020年定時会員総会資料」にて公開しています。

(<https://miitus.jp/t/SJWS/>)

Ⅳ. 第13回学術大会 第25回 SJWS 奨励賞・功労賞贈呈式

日 時：2020年09月13日 13：00～16：00

会 場：東工大蔵前会館 ロイヤルブルーホール（東京都目黒区大岡山）

Web会議システムZoomによるリアルタイム配信併設

プログラム

- 13：00 開式
- 13：00～13：05 会長挨拶
(近藤 科江・東京工業大学教授)
- 13：05～13：10 御来賓挨拶
(林 伴子・内閣府男女共同参画局長)
- 13：10～13：12 奨励賞選考経緯説明
- 13：12～13：20 奨励賞贈呈式
- 13：20～13：22 功労賞選考経緯説明
- 13：22～13：40 功労賞贈呈式、受賞者挨拶
- 13：40～13：45 文部科学大臣賞授与式
- 13：45～14：00 受賞者写真撮影
- 14：00～15：30 受賞記念講演
- 15：30～15：35 御来賓挨拶
(内海 房子・国立女性教育会館 理事長)
- 15：35 閉式



若手科学者賞 高瀬氏
奨励賞受賞者 坂田氏
奨励賞受賞者 服部氏
功労賞受賞者 大島氏
功労賞受賞者 森氏
内海氏 近藤会長

会長挨拶

第13回学術大会は、総会のZoom開催により延期されていたSJWS賞の贈呈式と、COVID-19の影響で授賞式が中止になった令和2年度 文部科学大臣表彰 若手科学者賞の伝達式を兼ねてZoom配信と会場とのハイブリッド開催といたしました。来賓として、国立女性教育会館の内海房子理事長にご臨席、内閣府男女共同参画局 林伴子局長からはビデオメッセージを頂きました。

SJWS賞には、本会設立の理念や存在意義が凝集されており、本会の女性研究者支援への貢献を一番端的に表しています。表彰盾を直接お渡しすることには、特別な意味があります。会場には、本賞の設立にご尽力された先生方も参加頂きました。設立当初は「10年くらい先には女性科学者に限る賞など不要となるくらい男女格差は無くなっているかもしれない」と期待されておられたそうですが、「いつの間にか25回を迎えて期待は甘かった」というお言葉も頂きました。意思決定に関わる管理職に占める女性の割合が数%という現状の中で、より上位のプロモーションを志す女性には、まだまだ高い壁が待ち構えているということは明らかです。ようやく若い世代には男女格差が無くなりつつありますが、我々の活動が不要になる時期はまだ先のように思います。

学術大会は、関東ブロック担当で開催し、関東ブロックの理事、賞担当理事など多くの方々のご支援を頂きました。また、会場の募金箱にご寄付を頂きました。どうもありがとうございました。引き続き、皆様のご支援・ご協力をお願い致します。

第25回日本女性科学者の会奨励賞賞選考経緯

賞選考委員会 委員長 梅津 理恵

第25回奨励賞は、2019年6月に本学会のHPに募集要項を掲載するとともに、本会広報誌(SJWSNews)、男女共同参画・女性研究者支援関連センターや施設がある80余の大学や研究機関へのメール案内、女性研究者メーリングリストへの配信、物理、化学、生物、医学関連の主学会HPへの掲載等を介して、賞担当理事で広く周知しました。2019年11月1日～20日までの約3週間を応募期間として募集し、全部で14名の応募がありました。内訳は、化学分野3名、物理・数学・情報分野3名、生物・生化学等分野2名、医学・歯学・薬学分野6名でした。特に優れた応募者を12月の第3回理事会にて選出(数学・物理・情報分野1名、医学・歯学・薬学分野4名)し、各専門分野の外部評価委員(各分野2～3名)に評価を依頼しました。その評価結果を参考に、3月の理事会にて奨励賞の趣旨にふさわしい候補者の最終選考を行いました。議論を尽くし、慎重に審議した結果、医学・歯学・薬学分野から坂田 麻実子氏、数学・物理・情報分野から服部 梓氏のお二人に奨励賞を贈呈することが決まりました。



今回は、例年に比べて応募者がやや少なめではありましたが、応募者の実績は全体的に高く、最終決定までには理事会において非常に慎重な議論を必要としました。現時点において十分に高い実績を持っておられるだけでなく、研究内容に独創性が感じられ、将来その分野を牽引することが期待される、という観点においても選考を致しました。今後、日本女性科学者の会奨励賞受賞者として、各界で活躍されることを祈念しております。

奨励賞受賞のご挨拶

筑波大学 医学医療系 坂田（柳元）麻実子

この度は、大変名誉ある第25回日本女性科学者の会奨励賞をいただき、光栄に存じます。

私は2000年に医学部を卒業して医師免許を取得し、2002年より血液がんを専門的に診る血液内科医として勤務しています。現在も血液内科医として筑波大学附属病院で勤務を続ける一方で、血液がんの一つである「T細胞リンパ腫」を研究テーマに研究を続けています。ゲノム解析に取り組むことで病気が発症する仕組みを明らかにし、これをヒントに臨床研究へと活かすトランスレーショナルリサーチに取り組んできた成果をご評価いただき、今回の受賞に繋がったものと思います。現在のように幅広く研究を発展させるには、基礎研究に共に取り組んできた研究室の仲間、臨床的な研究にご協力くださった筑波大学附属病院のスタッフ、他大学や病院で働く血液内科医の先生方、そして何よりも患者さんとそのご家族のご協力の賜であると痛感しております。研究を支えてくださった方々に、心より御礼申し上げます。これまでは、T細胞リンパ腫は大変稀ながんであり、血液がんのなかでも診断や治療が難しいとされてきました。皆で発展させてきたゲノム解析などにより診断法の糸口も見えてきており、新しい薬も次第に使えるようになったことで診療内容は少しずつ改善しています。今後も研究室の仲間や血液内科医の先生方と協力しながら研究を発展させ、T細胞リンパ腫の患者さんにより良い医療が実現するように、努力を続けて参りたいと思います。

T細胞リンパ腫の研究をはじめた当初、大変小さかった2人の子供達は、ようやく中学生となりました。臨床と研究の両立という困難な仕事を継続できたのは、筑波大学附属病院で共に働く仲間、そして上司の千葉滋先生のご理解があつたことと思います。一人一人の「女性研究者」がめざす生き方は多様であると思いますが、私自身が皆様から暖かいお心遣いをいただいたように、サポートを必要とする後輩には私自身がいつでも手を差し伸べられるように心がけたいと思います。

最後に、ときには仕事に没頭しすぎるところのあった私自身の在り方をそのまま受けいれて応援してくれた家族、なかでも、病弱であった私の両親にかわっていつも応援団を引き受けてくれた夫の両親に心より感謝いたします。

奨励賞受賞のご挨拶

大阪大学産業科学研究所 服部 梓

この度、2020年度日本女性科学者の会奨励賞をいただくことになりました、大阪大学産業科学研究所の服部です。この賞は、広く理系の分野において研究業績をあげ、その将来性を期待でき、かつ当学会の趣旨に賛同し、その達成のために努力していると認められる会員に与えられるとのことで、大変光栄に存じます。私自身は大学院博士後期課程時に二人の子供を出産し、これによって研究の時間がかなり短縮されました。ただ、研究は楽しいし、夫や子供たち家族との時間はかけがえのないものです。実験は研究室でしかできませんが、研究室にいらなくても考察、思考、論文作成は出来ます。研究/家庭が両立できるよう時間と研究スタイルを合理的に運用してきました。研究推進に必要なイノベーションは色々な経験に基づくものであり、家庭生活を通じて生まれたアイデアも数多くあります。実際に行き詰った問題を打破する発想は、研究室でパソコンにとらめっこをしているよりも家事や育児の合間に浮かび、成果に結びつきました。もちろん、順風満帆に進んだわけではなく、基本的にヘタレ気味な私を叱咤激励し、サポートしてくれた夫や在席研究室のメンバーのおかげでここまでやってきました。今回の受賞で、ちょっとだけ自信がついたので、これからも自分のユニークさを自らの価値として発信し、精進していきます。

日本女性科学者の会は、「女性科学者の友好を深め研究分野の知識の交換を図り、その地位向上を目指すとともに、女性と男性がともに個性と能力を発揮できる環境とネットワークの構築を推進することで、社会と世界の平和に貢献すること」を目的にしています。この理念と今回の受賞に触発されて、私も何かやらなくては！と、現在所属している大阪大学産業科学研究所に産研協働推進チームを発足させました。恐れながら私がチーム長を拝命し、男女協働推進だけでなく、広範にわたる、ダイバーシティ&インクルージョンの推進活動を進めています。変化に富んだ時代では多様な価値観が、可能性や成果を生み出します。「正解は一つ」を前提として慣例通りに働くのではなく、色々なことに果敢に挑戦して研究や研究環境の向上に微力ではありますが、貢献していきたいと思っています。

功労賞受賞にあたって

大島 範子

令和2年度功労賞受賞に際して、これまでお世話になった本会の諸先輩方、一緒に日本女性科学者の会の活動に取り組んできた会員の皆さまに心から感謝申し上げます。今年度はコロナ禍で、贈呈式は9月13日（日）に第13回学術大会として開催されるという異例の事態でしたが、会場の東京工業大学蔵前会館ロイヤルブルーホールで近藤会長から直接に表彰楯を受取らせていただいたことは感慨深いことでした。

振り返れば私がSJWSに入会したのは40歳の頃で、決して若くはない年齢でしたが、会長や総務担当理事が同じ大学の関係者だったことから、すぐに事務局業務をお手伝いするようになり、まもなく自身も理事となって会の事務局も担当するようになりました。当時は理事の再任に制限がなく、2006年度まで延々と17年間も理事を継続しました。その間、総務、日本女性科学者の会賞、学術誌等の担当として多くの会員の皆さまと接する機会を得ましたことは、様々な思い出として私の人生を彩ってくれています。もちろん苦勞もありましたが今となっては懐かしく、機会があれば当時一緒に苦勞した方々と思い出を分かち合いたいと思うのは、自分が年をとった証拠かもしれませんね。

2007年度から2010年度の4年間は会長を務めましたが、事務局運営は大学内の会員の全面的な協力を得ることができ深く感謝しています。当時は勤務校（東邦大学）での理学部長や女性研究者支援活動責任者、日本動物学会の庶務担当理事等の役職が重なり、また、親の介護も加わって、連日時間との戦いでした。もちろん教育・研究も継続していましたが、研究室の学生さん、特に大学院生には助けられました。このように自分が何かを行う時には、周囲の皆さんにいろいろとお世話になっていることを決して忘れてはならないという教訓を得ることができました。2011年度から2018年度までの8年間は監事として理事会に参加しましたが、大倉会長の時に本会は一般社団法人となり、社会的責任がより一層大きな団体となりました。期待も大きくなっているように思います。時代も進み、会のあり様も変化している現在、本会の果たすべき責任は何か、じっくり考えていただければ嬉しい限りです。

功労賞受賞の挨拶

お茶の水女子大学 森 義仁

日本女性科学者の会のみなさま、2020年9月に功労賞を頂きました森義仁です。このような身に余る賞を与えて下さりととてもうれしく思います。この賞を頂くことになりましたのは、「女性と科学」について長きにわたり一緒に語りまた行動して下さった多くの方々との出会いでした。その始まりをご紹介します、受賞のご挨拶としたいと思います。

西暦が2000年になった頃、教育、福祉、環境等、限られた範囲の人々だけの問題ではなく、誰もが関わり、その解決に誰もが必要とする問題でありながら、誰もがそれに向き合っているわけではない問題が、日々の生活の中で大きくなってきたように思われました。私は自身の専門の中で活動するだけで、「それら」と向き合うことのない一人でした。数名の理学部学生の発案による科学の歴史本を紹介する「ランチ会議」は、女子大学の図書館に比較的多く所蔵される「ジェンダーの視点」を含む歴史書に会うことになりました。その「視点」は私には未知のものでありましたので、学内のジェンダー研究センターに出かけました。そこでは自然科学の研究分野や研究者が研究材料となり、「ジェンダーの視点」から議論されていました。自分たち自身がまた自分たちの研究領域が、「自分たちの知らないところ」で議論されていました。当時、そのセンターの指導的立場にあった館かおる先生と小川眞里子先生に誘われ「ジェンダーと科学」研究会に参加し、「ジェンダー主流化」を知ることになりました。

センターには国内外の研究者が姿を現し議論をして行きました。その様子を見聞きすることは貴重な経験でした。EU研究総局1998年設置「女性と科学」ユニット部長のニコル・ドワンドル氏からはEUの女性科学技術者政策、これは2006年からの日本の女性研究者支援の前例に相当します。ユネスコネパール支部の菅野琴氏からは途上国の教育におけるジェンダー政策、ユネスコの2000年設定目標は「万人に教育を」、現在のSDGsの上流に位置します。

私はこのセンターでの人々との出会いに前後し、日本化学会男女共同参画推進委員会を経て、2004年に男女共同参画学協会連絡会に加わり、日本女性科学者の会の活動を知ることになりました。その名前に「女性」が付いているものの、その活動が目指すものが「万人に科学・技術を」なのではと思いました。それは、2020年の現在まで「女性と科学」に関する私の長きに渡る行動の軸にもなって行きました。

令和2年度 文部科学大臣表彰 若手科学者賞 (SJWS推薦)



岡崎(高瀬)恵子氏
(OKAZAKI-TAKASE KEIKO)

NTT物性科学基礎研究所・主任研究員
博士(理学)東京大学

研究課題：「半導体量子ナノ構造のスピン状態制御および量子輸送の研究」

推薦理由：近年、電子の自由度や多彩な量子現象を利用することで従来のエレクトロニクスを超えるスピントロニクスや、新奇な量子効果の発現を利用する量子技術が精力的に研究されている。岡崎(高瀬)氏は、グラフェンやIII-V 属半導体ナノワイヤなど特徴的な材料を利用して独自の形状の電界効果トランジスタ(FET)を開発し、極低温・強磁場等の極限環境下での電気測定や系統的な理論モデル計算を行い、世界初の量子現象の観測や機構解明、および世界最高級のスピン回転効率を達成した。とくに、スピンの回転を制御するスピン軌道相互作用を世界最大級に変調できる半導体ナノワイヤ素子の実現は、低消費電力スピンFET 実現に貢献する革新的成果である。本研究成果の活用により低消費電力社会が実現すると期待される。

略歴：東京大学理学部物理学科卒業、東京大学大学院理学系研究科物理学専攻博士課程修了、博士(理学)。2009年4月よりNTT物性科学基礎研究所所属、現在、主任研究員。

連絡先：〒243-0198 神奈川県厚木市森の里若宮3-1
NTT物性科学基礎研究所 量子科学イノベーション研究部 量子固体物性研究グループ
TEL：046-240-3181 E-mail：keiko.takase.wa@hco.ntt.co.jp

受賞の挨拶

岡崎(高瀬)恵子

この度は、日本女性科学者の会にご推薦いただきまして、令和2年度文部科学大臣表彰の若手科学者賞を受賞することができました。過分な賞を拝受いたしまして、お力添えくださった皆様のお顔をお一人お一人思い出しながら感謝すると同時に、もっと研究を頑張らなくては、と身が引き締まる思いであります。

日本女性科学者の会の存在を初めて知ったのは大学院生のときで物理学会誌の紙面だったと思います。その後社会人となり、会社の研究所で基礎研究を行う研究者として活動してまいりました。一方、私の所属する研究所では女性の数が比較的少なく、学会でも女性の数は多くありません。大学に入ってからからはクラスメイトに女性の数が少ないのは当たり前でしたが、社内のダイバーシティ活動や研修で多くの事例を学び多くの方々の話を聞くうちに、女性が研究者であり続けること、もしくはキャリアを維持しつつ働き続けることには、男性が当然のように働いている状態とは違い多くの苦労があったこと、そして今もあることを学びました。「物理分野では女性研究者の数は少ないけれども、ほかの分野の方々はいろいろな世代で活躍していたり、活躍し続けていたりするのだろうか?」と疑問をもち、さまざまな分野の方と交流できる場として楽しみにしてきました。その後、日本学術振興会主催の招待制の会議で出会った方とたまたま女性科学者の会で出会ったり、女性科学者の会で出会った方が恩師と学会で一緒に仕事をしていたり、会員の方々の華々しい研究内容を伺う機会があったりと、それぞれの分野でご活躍されている姿を見て大変励まされました。また、専門分野を問わず、どの先生方のお言葉にもそれぞれの経験に裏打ちされた重みや温かさと同時に厳しさがあがり、ときおり自分が中学生や高校生のときに戻ったかのようにハッとさせられ、大変よい刺激をいただいています。そして、皆様にお会いしてお話を伺う機会があるたびに、今回も参加してよかった、面白かったし勉強になったと思っています。

私はまだまだ発展途上の身ではありますが、いつか皆様のように他人に元気や活力を少しでもお渡しできるような、vitalityあふれる研究者になりたいと思います。今後とも引き続き皆様のお仲間に入れていただきながら頑張っていきたいと思います。今回はご挨拶の機会までいただきまして誠にありがとうございました。

日本女性科学者の会 第13回学術大会の感想 (妻に随行した夫の目線から)

岡崎 雄馬

妻の恵子が、女性科学者の会(SJWS)に推薦を頂き、2020年度文部科学大臣賞を受賞しました。賞の授与式が行われた第13回学術大会に付き添い参加したところ、今回感想の執筆依頼を頂いたところです。妻の入会以降、SJWS関連行事へ一緒に参加させていただく機会が何度かありました。最初は2017年GWSTの大会で、シンポジウムに村山斉先生の講演があるから聴きに行こうと誘われ参加し、宇宙論分野で活躍する女性科学者の話や、イタリアなどでは女性学生のほうがメインとなっている理工系学科もあるといった話を聞き興味を引いたことを覚えています。今回、男性の参加者は私を含め2、3名でしたが、特に気まずくもなく気楽に参加させていただけました。妻の研究紹介の他、奨励賞・功労賞の受賞者講演もあり、研究の他にも職場環境の改善などに尽力された活動に関する講演など聞くことができました。私自身は物理・電気工学に携わっており、理工系の中でも特に女性の割合が少ない分野かと思います。SJWSの行事に顔を出して以降、特にその様な分野で女性が少ないのはなぜか、原因は何かと考えることが増えました。今後も女性研究者の活躍に尽力されているSJWSを応援させていただければと思います。

「T細胞リンパ腫におけるトランスレーショナルリサーチ」

筑波大学・医学医療系血液内科・准教授 博士(医学) 東京大学 坂田(柳元)麻実子

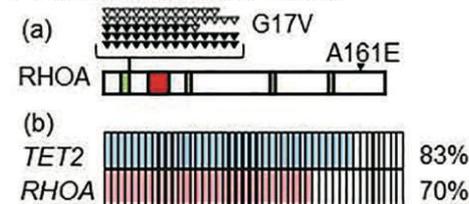
血管免疫芽球性T細胞リンパ腫(angioimmunoblastic T-cell lymphoma: AITL)は、血液がんの一つである。全身の多発リンパ節腫大に加えて、発熱、皮疹、関節炎などの自己免疫疾患でみられる症状がみられやすい。腫瘍細胞(注: AITLのがん細胞)はT濾胞ヘルパー細胞(注: B細胞の成熟や機能を助けるT細胞の一つ)に似た性質をもち、高内皮細静脈(注: 血管の一つであり、AITLの名前の由来にもなっている)やさまざまな炎症細胞がみられる。こうした特徴のために、血液がんの一つであるにも関わらず、炎症性疾患と区別しづらく、専門医にとっても診断が難しい疾患の一つである。私は血液内科医(注: 血液がんなどの血液疾患を専門的に診る医師)としてAITL患者の診断や治療にあっており、治療成績の向上を目指して、診断法や治療法の研究を行ってきた。

まず、AITLを含むT細胞リンパ腫(注: 成熟Tリンパ球に類似した性質をもつ血液がんのこと)のゲノム異常を調べ、AITLの約70%にRHOA遺伝子変異がみられることを明らかにした。RHOA遺伝子変異の部位は、17番目のアミノ酸がグリシンからバリンに置換されると予想される変異(以下G17V RHOA変異)に集中していた(図1、Sakata-Yanagimoto et, al. Nat Genet 2014を引用し改変)。また、G17V RHOA変異がある場合には、エピゲノムに関わるTET2遺伝子にも変異を認めた(図1、Sakata-Yanagimoto et, al. Nat Genet 2014を引用し改変)。この研究成果は、AITLおよび類縁疾患(注: 種類が似た病気のこと)の分類や診断にも影響を与え、世界の血液内科医や病理医(注: 主として病理組織学的所見に基づいて診断などを専門に行う医師)が参考とする血液がんの分類について記載された本(“WHO classification of Tumours of Haematopoietic and Lymphoid Tissues” 2017年度改訂版)にも引用された。さらに、G17V RHOA変異はAITL以外の疾患にはほとんどみられないことから、G17V RHOA変異を検出することでAITLの診断に役立てるための研究も行ってきた。具体的には、がんの組織から抽出したDNAや血清中を循環するDNA(注: セルフリーDNAともいう。がん細胞に由来するDNAが含まれると考えられている)を利用したG17V RHOA変異検出法の研究をすすめた。さらに、企業との共同研究によって、現在までにG17V RHOA変異検査を受託検査として実用化した。これにより、日本全国の病院からG17V RHOA変異検査が可能となった。

さらに、AITLのゲノム異常に着目した分子病態(注: 分子レベルで病気の原因を明らかにすること)の研究を行ってきた。G17V RHOA変異体(注: G17V RHOA変異によってつくられる異常な蛋白のこと)はVAV1蛋白と結合してその活性化を助けることを明らかにし、一方でG17V RHOA変異が陰性の症例については、VAV1遺伝子自体の活性化変異を発見した。そこで、「RHOA-VAV1シグナルの活性化」がAITLを発症する鍵となっていると考えられた。さらには、他の血液がんに対して日常診療のなかで既に使用されているダサチニブという薬剤によって「RHOA-VAV1シグナルの活性化」を阻害できることを明らかにした。さらには、ヒトAITLでみられたゲノム異常を再現することで、AITLに類似したがんを発症するマウス(AITLモデルマウス)を作製した。AITLモデルマウスを利用し、ダサチニブを投与する実験を行ったところ、マウスの生存は延長するという治療効果がみられた。これらの研究成果を参考にして、再発難治AITL患者に対してダサチニブの安全性を調べるフェーズ1研究を行った。現在はこれらの研究を進め、再発難治AITL患者を対象として、ダサチニブの適応拡大を目指した医師主導治験を行っている。

本研究のように、基礎研究で明らかになったことをヒントに臨床開発を進めるトランスレーショナルリサーチによって、難治がんに対する根本的な治療法の開発にたどり着ける可能性がある。なお、RHOA変異は胃がんをはじめとする他のがんでも発見された。今回のRHOA変異に関する私達の一連の研究は、AITLにとどまらず、RHOA変異のある他のがんの分子病態研究や治療研究の一助となることが期待される。

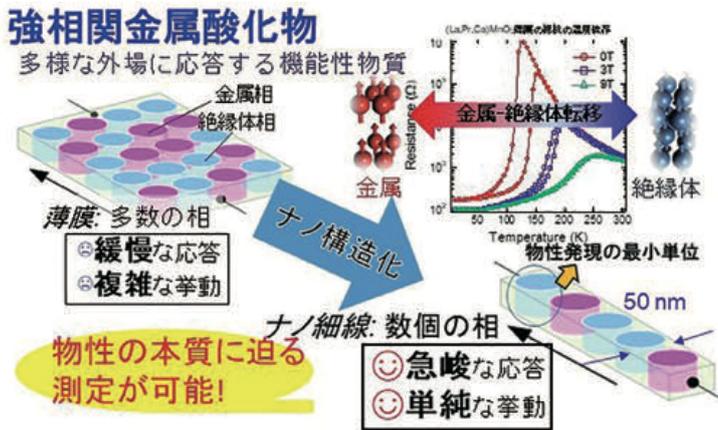
図1 AITLにおけるゲノム異常



AITLの70%ではTET2、RHOA変異が共在
Sakata-Yanagimoto M. Nat Genet 2014

原子精度の立体造形技術による強相関金属酸化物のナノ相転移特性解明

大阪大学産業科学研究所 3次元ナノ構造科学研究分野
准教授(PI) 博士(理学) 奈良先端科学技術大学院大学 服部 梓



強相関酸化物は相転移により自らの状態を劇的に変え、巨大かつ急峻な物性値の変化をもたらす材料群である。これらの材料の重要かつユニークな性質は、電子同士の強い相互作用(強相関性)をつかさどる電荷、スピン・軌道、格子といった自由度が作り出す秩序状態が、様々な外部刺激(温度、磁場、キャリア濃度、光など)で雪崩的に融解し、相転移することである。物性物理学のホットトピックスとして、また優れた相転移特性のデバイス展開を目指すべく相転

移の本質を解明しようと数多くの研究がなされてきた。しかし、金属酸化物の物性発現の最小単位である電子相ドメインサイズは、数十～数百nmであるため、これまで研究対象となってきたバルク、薄膜というマクロサイズの試料では平均的な情報しか得られない。そのため、巨大相転移特性などの物性の起源は明らかでなく、またデバイスとしての制御技術も確立できていなかった。

相転移の起源に迫る唯一の解決法は、その発現起源解明への実験的なアプローチで、言い換えると、1つの秩序状態：単一電子相に対して計測評価を実行することである。私共は、独自の3次元ナノ構造創製技術を開発し、相関金属酸化物の物性起源であるナノ電子相ドメインの閉じ込め(隔離)を可能とし、単一ナノ電子相の金属-絶縁体転移特性の計測に成功した(図1)。そして、ナノ電子相が一次相転移特性、電子相の転位点分布を実験的に解明した。このナノスケールの物理現象の解明は、強相関電子系の相転移の本質に迫り、当該分野の学理構築および応用展開を可能とする重要な成果である。

「試料サイズを対象とする物性の起源であるサイズまで微細化することで物性発現の最小単位にアクセスできる」という一見単純に見えるが高度なアイデアを具現化するために、表面科学と結晶成長を融合させたナノ立体造形を可能とする高度な技術を構築し、(1)位置・形状・サイズを規定した3次元ナノ構造を実現する高精度のナノ構造創製技術を開発した。そして、(2)強相関金属酸化物の相転移特性の起源解明の実現に至っている。

精密制御された3次元ナノ構造体の創製にあたり、高度に発展してきた基板面垂直(c軸)方向への薄膜作製技術を面内方向に転換することで、制御性が2次元から3次元へと飛躍的に発展したナノ構造体の造形を可能とした。3次元構造作製では、表面に加え側面構造の制御も必要であるが、成長の起点として求められる原子レベルで平坦で秩序化した表面状態を持った側面構造制御は行われていなかった。そこで表面科学的手法を3次元拡張することで側面制御法を確立し、立体的にデザインされた金属酸化物の単結晶ナノテンプレート側面からの薄膜結晶成長により、面内方向に分子層精度でサイズ制御した金属酸化物のナノ立体構造創製に世界で初めて成功した。多様な機能性酸化物材料に対して50nm以下のサイズで完全位置制御3次元ナノ構造体を作製できるのは、現時点では私共のグループのみである独創的なものである。この技術により、金属酸化物ナノサイズ試料での物性研究が可能となり、超巨大磁気抵抗、金属-絶縁体相転移を示す種々の金属酸化物のナノ細線において、その物性起源である数十nmサイズのナノ電子相の直接計測を達成している。

半導体量子ナノ構造のスピ状態制御および量子輸送の研究

NTT物性科学基礎研究所 高瀬 恵子

近年、ナノテクノロジー技術の発展により半導体中の電子状態の量子力学的現象を実験的に検出できるようになってきた。同時に、新しい物理的・数学的概念やエキゾチックな物理現象が提案され、新しい材料や構造で新規性能をもつ量子効果素子が実現されている。本講演では、Schrödinger方程式で記述される量子力学をこえて、Dirac方程式で記述される相対論的量子力学が実験的に観測される半導体ナノデバイスの量子輸送現象について、シリコンカーバイド (SiC) 上に成長したエピタキシャルグラフェン電界効果トランジスタ (FET) およびIII-V属半導体ナノワイヤFETを用いた研究を報告する。

グラフェンは炭素原子がハチの巣状に連なる一層の原子シートである。一般的な半導体とは異なるゼロエネルギーギャップ半導体であり、Dirac Coneとよばれる電子状態をもつ。そのため、半整数量子ホール効果状態 ($\nu=2$ 量子ホール状態) を示すが、SiC上エピタキシャルグラフェンは通常のグラファイトから剥離したグラフェンとは異なり、異常に広い $\nu=2$ 量子ホール状態を示すことが知られており、その機構について広く議論されていた。我々は、高品質かつn型からp型にキャリア密度が広く変調できるFETを世界に先駆けて実現して系統的な測定を行った[1]。さらに、グラフェンと界面準位の量子キャパシタンスが競合するモデルを提案し、実験結果と理論モデルが非常によく一致することを示し、異常に広い $\nu=2$ 量子ホール状態の機構を明らかにした[1]。さらに、界面準位を利用したエネルギー分光が可能となることを示し、量子ホール状態のプラトー転移の臨界指数と関連付けて議論した[2]。

また、相対論的量子力学が半導体中で生じる結果観測される最もよく知られた相互作用はスピン軌道相互作用であるが、インジウムヒ素 (InAs) ナノワイヤやインジウムアンチモン (InSb) ナノワイヤを用いてゲート・オール・アラウンド型構造[3]や近接型バックゲート構造[4]のMOSFETを実現し、外部電界でラシュバ型スピン軌道相互作用を世界最大級に変調し大きなラシュバ結合定数を低ゲート電圧で実現した研究も紹介する[3,4]。これは、将来的な省エネルギー・スピンFETの実現に貢献する。

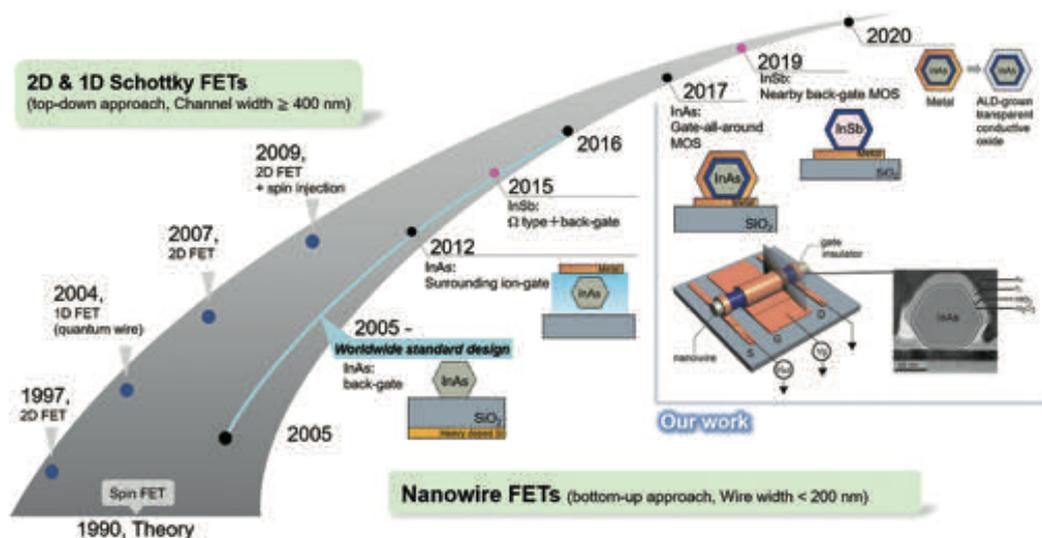


図1：スピンFETの理論論文が報告されてから、半導体トランジスタにおけるスピン軌道相互作用の電界制御の研究の歴史。

参考文献

- [1] K. Takase, S. Tanabe, S. Sasaki, H. Hibino, and K. Muraki, Phys. Rev. B 86, 165435(2012).
- [2] K. Takase, H. Hibino, and K. Muraki, Phys. Rev. B 92, 125407(2015).
- [3] K. Takase, Y. Ashikawa, G. Zhang, K. Tateno, and S. Sasaki, Sci. Rep. 7, 930(2017).
- [4] K. Takase, K. Tateno, and S. Sasaki, Appl. Phys. Express 12, 117002(2019).

第13回学術大会、ハイブリッド開催報告

関東ブロック理事 板倉 明子

コロナ禍中に行われた学術大会の“裏方の報告”をします。会場となる大学や東京都の方針次第では対面開催ができなくなる可能性があったので、web開催と、現地開催とwebを併用するハイブリッド開催との双方を想定して準備を行いました。ハイブリッド開催では会場スクリーンに投影する通常の講演とweb配信を同時に行います。講演者の発表音声と会場の質問音声の双方を配信する必要があります。単純なところでは、たとえば発表者がレーザーポインターでスクリーンの指したのでは、web受信者には伝わりません。スタッフで疑似Zoom学会を行ったり、他学会のweb学会中に切り替え練習をしたりして、当日にこぎつけました。

近藤会長のご挨拶で会が始まり、ご来賓の林伴子内閣府男女共同参画局長からは動画でメッセージをいただきました。賞選考経緯説明はweb参加の梅津担当理事から行われました。奨励賞を受賞された坂田様、服部様、功労賞を受賞された大島様、森様は会場に足をお運びいただけたので、贈呈式の様子を会場カメラからweb配信しました。文部科学大臣賞(若手研究者賞)につきましても、文部科学省で授賞式行うことができずに推薦団体であるSJWSに賞状が届いたことから、伝達式として近藤会長から岡崎(高瀬)様に賞状をお渡しし、その様子も中継しました。

web配信を考慮し、受賞記念講演ではPC内のポインターを使っていただき、講演者PCからのweb配信を受信されたものを会場スクリーンに映し出しました。音声は、マイクを使ってご講演いただき、会場で集音して配信しました。事前に会場設備の機種を確認できれば、あるいは端子の数が十分であればよかったです。各スタッフのノートPCを持ち寄ったため、①講演中に配信する講演者PC、②会場中継のホストPC、③講演者の配信したスライドを会場に映す上映PC、そして④web配信状況チェックとweb質問者確認のモニターPC、と4台のPCを駆使した会議となりました。なお会場準備や写真撮影の間、web参加の方たちにはホストPCからJSWS紹介の自動プレゼンテーションを配信していました。

今後webでのミーティングや学会も増えていくことと思います。それらは育児中の女性研究者や、遠方、海外に居住する研究者には歓迎される開催形式ではないかと思えます。今後も必要時にはweb開催やハイブリッド開催を検討していきたいと思えます。

お手伝い頂いた学生さん2名の感想

東京工業大学 生命理工学院 峯岸 美紗・平野 龍一郎

新型コロナウイルスの影響を受け、多くの学術大会が中止または延期の措置を取り、一部の学術大会がオンラインで開催され始めていた9月初旬に、東京工業大学蔵前会館ロイヤルブルーホール会場とZoom機能を使ったweb配信のハイブリッド形式で開催した「日本女性科学者の会 第13回学術大会」の運営に携わらせていただきました。ハイブリッド形式で開催された前例がない中での運営は、非常に不安でございましたが、大きなトラブルなく無事に開催でき、安心しております。

受賞された先生のご講演は分野外の私たちにも非常に理解しやすく、ワクワクしながら研究の変遷などを伺わせていただきました。また、研究の話だけでなく、女性研究者としての時間の使い方も伺うことができ、他の学術大会では得られない貴重な勉強をさせていただきました。今後の自分の研究生活に応用させていただきます。

最後になりますが、感染対策にご協力いただき、現地・webともにご参加くださいました皆様に改めて感謝いたします。ありがとうございました。



SJWS新春シンポジウム2021の開催報告

2021年1月9日(土)に愛知大学名古屋キャンパスにて東海ブロック主催の2021年新春シンポジウムを開催した。今年は、コロナ感染の再燃をうけオンラインとのハイブリッド形式で行った。まず、近藤会長の年頭挨拶の後、特別講演①として、ぎふ総合健診センター所長・岐阜大学名誉教授村上啓雄先生にご登壇いただいた。先生は岐阜大学出身の内科医で、感染症をご専門とし、岐阜県感染症対策本部専門家会議の主要メンバーとして新型コロナウイルス感染症対策において重要な役割を果たしている。ご多忙中、「COVID-19～今までに分かったことと今後の課題～」と題して、現在世界中の皆が注目しているCOVID-19感染症について、最新の情報を詳しくお話いただいた。まず、国内外での最新の発生状況と、本感染症の臨床的特徴、感染経路、感染予防策、現在の治療と今後期待される治療、さらにワクチンの開発状況、個々のワクチンの有効率と有害事象について解説された。



村上 啓雄氏



辻 篤子氏

その中で、このウイルス感染者の約3割は無症状、約6割は軽症であり、通常の日常生活が可能で潜伏期が長いことから、常にマスク着用と手指衛生を遵守し、毎日体温・体調をチェックして体調不良時は出勤しない、“密”を回避する、といった日常生活の注意点が喚起された。私たちの毎日が一変した1年間であったが、不確実な情報に惑わされず、専門家の指示を守って適切に対策を取ることが重要と強く実感した。次に、特別講演②として、中部大学特任教授の辻篤子先生から、「女性研究者に期待する」と題してご講演いただいた。辻先生は1979年に朝日新聞に入社され、科学部記者として科学朝日、アエラなどの編集に携わり、マサチューセッツ工科大学ナイト科学ジャーナリズムフェロー、アメリカ総局を経て、論説委員を務めるなど長年、ジャーナリストとして科学技術や医療分野の取材に取り組んで来られた。そのご経験を通じて見てこられた、アメリカや我が国における女性科学者の活躍の変遷や現状について、事例を紹介しながら、わかりやすく解説していただいた。また、元米国科学振興協会COOのRohlfing博士が提唱した女性の科学技術への参画を妨げる「微妙にして陰湿な要素」を紹介され、我々がそれを認識することが極めて重要であることを示された。さらに、「女性は科学に力を与える」という次世代の女性科学者へのエールとともに、生まれ変わるなら今度は科学者になりたいとのお言葉で締めくくられ、先生をととても身近に感じる事ができた。

最後に、13件のショートプレゼンテーションが実施された。会場から1件、他の12件は、それぞれ参加者の自宅や職場からオンラインで行われた。発表分野が多岐にわたり、通常の学会で考えられないようなバリエーションが、また本会らしい特徴でもあったと思う。発表のタイトルと発表者をリストする。水素エネルギーの将来性と課題(板倉明子)、口腔扁平上皮癌の浸潤・増殖におけるCTRP6の機序解析(波野公香)、RASによるがん悪性化機構の解明と制御法の開発(川内敬子)、保井コノ没50周年に思う(吉祥瑞枝)、生後直後10日間のマウス頬ひげ切除が社会性行動の変化及び情動制御に及ぼす影響(宗宮仁美)、ナノ材料反応場観察のための新規手法の確立～磁性ナノ粒子と高分子ナノ粒子を例に～(高橋知里)、細胞内ROSシグナル解析を目指したケージド化合物の合成研究(辻美恵子)、液滴電気穿孔法を用いた応用研究への展開～電気で作るiPS細胞～(沼野利佳)、マルチ生物発光レポーターシステムを用いたがん細胞の骨微小環境に対する応答の観察(峯岸美紗)、自分のからだを俯瞰する身心一体科学(跡見順子)、筋芽細胞の1細胞牽引力計測と張力発揮基盤としての細胞接着と細胞外基質(清水美穂)、術後悪心嘔吐の発現関連因子を用いた発現予測方法の有用性に関する研究(曾田翠)、「香り」を利用した省労力で持続的な植物保護技術の開発(木下奈都子)。

日本中で活動が制限される中、9名の現地参加者を含む45名にご参加いただき、また初めてのZoomによるオンラインセッションを実現できた。現地に足を運んで下さった講師の方々とすべての参加者の皆様のご協力に改めて感謝申し上げたい。

(東海ブロック理事 永澤秀子、清島真理子、浜田恵子)



第18回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム 参加報告

男女共同参画学協会連絡委員会 委員長 中山榮子

2020年10月17日(土)10:00~17:40に開催された第18回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムに(一社)日本女性科学者の会から参加した。例年関東圏の会場にて開催されていた(本年度も日本大学にて予定されていた)が、コロナ禍のためZoomウェビナーシステムを用いたりリモート開催となった。当日は700名近い参加者であったと発表があったが、東京圏以外の居住者にとってメリットもあったのではないかと考えられる。本会からは、近藤会長、大倉監事、板倉理事、本間理事、野呂会員、丸山会員、中山の7名が参加した。

シンポジウムのテーマは「女性研究者・技術者の意思・能力・創造性を活かすために~女性リーダーが例外ではない社会を目指して~」で、プログラムの概要は以下の通りであった。また、シンポジウムに先立って、ワークショップが開催され丸山会員が参加した。シンポジウムには、学会活動報告とWG5(女性科学者技術者の活躍促進に関する政策と効果の国際調査)のポスターをWeb上に掲出し、資料集に報告書を提出した。



分科会

- 講演 1 「南極で活躍する女性たち」原田尚美 (JAMSTEC)
- 講演 2 「キリングループの多様性推進とキャリア形成について」神崎夕紀 (協和発酵バイオ株式会社)

Workshop Summary Lily Cushenbery (University's College of Business)

特別企画

「第18回期提言・要望活動報告」「緊急事態宣言による在宅勤務中の科学者・技術者の実態調査報告」

シンポジウム

基調講演 4 題とパネルディスカッション

詳細は、男女共同参画学協会連絡会HP (<https://www.djrenrakukai.org/symposium1.html>) を参照されたい。

若手女性研究者のリーダーシップ育成とネットワーク構築のためのWorkshopに参加して

SJWS会員 丸山 美帆子

2020年10月16日、第18回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムプログラムの一環「若手女性研究者のリーダーシップ育成とネットワーク構築のためのWorkshop」に参加させて頂いた。ワークショップは、以下の3テーマで実施された。

- Workshop 1 : Barriers for women in STEM and leading change
- Workshop 2 : Leading teams for innovative performance
- Workshop 3 : Practicing persuasion and influence

私が参加したWorkshop 2の内容を簡単に紹介し、感想を述べたい。詳細は、会員専用HP(<https://miitus.jp/t/SJWS/info/11/>)に掲載頂いた。

①講義「独創性とは? イノベーションとは?」

Lily Cushenbery博士が「リーダーとして革新的なパフォーマンスを目指したチームを指導していく際に、意識しなければならないこと」を中心に講義をされ、独創性とイノベーションの定義が明確にされた。

②イノベーションを起こすためのグループワーク

Mumfordらは、イノベーションのプロセスは次の8ステージから成ると提唱している。(1)問題の識別、(2)情報収集、(3)概念の選択、(4)概念の組み合わせ、(5)アイデアの創出、(6)アイデアの評価、(7)実施計画、(8)解決のモニタリング。これらのプロセスを体験するため、与えられたテーマでグループワークを行った。5分間のワークを複数回繰り返し、その度に与えられた課題をクリアしていった。

③まとめの講義: グループワークの発表後、まとめの講義がなされた

オンラインでの一方的かつ強制的な進行は、新鮮で緊張感にあふれていた。そして、自分が無意識に周囲を伺い、空気を読んで発言しようとしていることに気づいた。私は人前で意見を述べるのが苦手ではないが、初対面のメンバーで様子も分からない中で積極的に発言するには心の障壁を強く感じた。チームメンバーが独創的なアイデアを発信しやすい環境が重要で、リーダーも最初はどんな雰囲気になろうか迷う。しかし、最初の一步を踏みだし、それに並んで歩んでくれるメンバーが現れることで現場は大きく変わっていく。それを実感するのに有効なワークショップであった。貴重な体験の機会を与えて下さった「日本女性科学者の会」の皆様にご心より御礼を申し上げます。ありがとうございました。

【2019年度会務ならびに事業報告】

1. SJWS主要会議の開催状況

【総会】

2019年5月26日(日)、学士会館302号室、10:30~12:26
出席会員数:149名(委任状含む)、会員総数283名:
会員総会運営規則により成立

(1)2018年度会務ならびに事業報告

(2)2019年度事業計画案

(3)2018年度収支決算と監査報告

2018年度一般会計決算書、2018年度特別会計決算書、60周年記念事業決算書

(4)2019年度予算案

(5)新理事候補の紹介と新理事の選任

・報告事項

①規則の変更②60周年記念アンケート結果について

【理事会】

①2019年5月26日(日)第1回通常理事会(第30回)、
学士会館302号室

②2019年6月16日(日)第2回通常理事会(第31回)
青山学院大学青山キャンパス総研ビル(14号館)

③2019年8月3日第1回臨時理事会(第32回)Web会議

④2019年10月16日第2回臨時理事会(第33回)Web会議

⑤2019年12月8日(日)第3回通常理事会(第34回)
東京工業大学田町キャンパス・イノベーションセンター(CIC)

⑥2020年3月8日(日)第4回通常理事会(第35回)
東京工業大学田町キャンパス・イノベーションセンター(CIC)

⑦2020年4月12日(日)第5回通常理事会(第36回)、Zoom会議
※議事録は会員専用HPに掲載しています。

【総会・理事会決定事項】

①理事の選出。代表理事、ブロック長選出

②ブロック活動の活性化。各ブロック活動の詳細は
NEWS126号に掲載

③サイエンスコミュニケーターの資格認定要件を改正

④理事会のペーパーレス化

⑤ブロック再編成

⑥理事選挙:各ブロックの理事数、理事の立候補方法
について議論

⑦2020年度定時会員総会がZoom開催になったことを受
けて「SJWS奨励賞」「SJWS功労賞」贈呈式を延期

⑧2020年度学術大会は、関東ブロックが担当し、贈
呈式を合わせて行う。9月開催予定。新春シンポジ
ウムは「東海・中部・北陸ブロック」が担当

⑨学術誌の投稿規定改正

⑩SJWSホームページの充実

⑪入会、退会について:新入会員の承認を一本化。退会希
望者について理事全体で情報共有するプロセスを決定

⑫講演講師料等の目安を作成

⑬会計について:予算の事前申請。受け取りは当座

預金、年度末に普通預金に振り分ける。現金処理
は避ける。

⑭SJWS共催・後援申し込み書式を新規作成

2. 出版活動

・SJWSNEWS:2019年9月125号、2020年3月126号の発行

・日本女性科学者の会学術誌:2020年3月第20巻1号
(電子版)の刊行

3. 奨励賞・功労賞の贈呈

①第24回2019年度奨励賞・功労賞贈呈式ならびに奨励
賞受賞記念講演会、懇親会

2019年5月26日(日) 学士会館203号室

【奨励賞受賞者】

・栗原 晴子:琉球大学理学部海洋自然学科助教

・南保 明日香:北海道大学大学院医学研究院准教授

・丸山 美帆子:大阪大学大学院工学研究科

日本学術振興会特別研究員(RPD)

【功労賞受賞者】

・ディルワース マチ(Dilworth Machi):

沖縄科学技術大学院大学 副学長

・小浪 悠紀子:東京大学大学院新領域創成科学研究科
非常勤講師

②第25回2020年度奨励賞・功労賞の選考

【奨励賞】

・坂田 麻実子:筑波大学医学医療系 准教授

・服部 梓:大阪大学産業科学研究所 准教授

【功労賞】

・大島 範子:東邦大学名誉教授・理事、SJWS元会長

・森 義仁:お茶の水女子大学基幹教育院自然科学系 教授

4. SJWS主催事業

【SJWS2019年度例会・新春学術シンポジウム】

60周年記念事業と第12回日本女性科学者の会学術講演会

①日時:2020年1月12日(日)13:00~19:00

②会場:九州工業大学戸畑キャンパス百周年中村記念館

③担当:中国・四国・九州・沖縄ブロック

④参加者:37名

⑤プログラム:

<特別講演>座長:城崎由紀(SJWS理事、九州工業大学)

<講演Ⅰ>演者:安河内恵子(九州工業大学副学長、
男女共同参画・社会連携担当)

演題:九州工業大学における男女共同参画の取り組み

<講演Ⅱ>演者:稲田幹(九州大学中央分析センター准教授)

演題:九州における

女性研究者ネットワークの構築

/Wキュービック

<講演Ⅲ>演者:角田聡子(九州歯科大学歯学部

地域健康開発歯学分野助教)

福原正代(同総合内科学分野教授)

演題：九州歯科大学の現状と、同窓会
女性部会「リーフの会」の活動紹介

〈一般講演〉ショートプレゼンテーション
〈ポスターセッション〉14ポスター

- ◆JNWES（日本女性技術者科学者ネットワーク）運営
第9回日中韓女性科学技術リーダーズ会議
(会長：野呂知加子)

- ①日時：2019年10月11日（木）
- ②会場：お茶の水女子大学国際交流留学生プラザ
- ③参加者：49名（中国5名、韓国7名、日本37名）
- ④内容：

Session1：Evaluation Systems for Gender
Equality Activities

Session2：Career Development Programs for
Next Generations

Session 3：Role of Chemistry for SDGs

5. SJWS参画事業への参加

- ◆女子中高校生夏の学校2019への参加◆

- ①開催日：2019年8月9日(木)～11日(土)
- ②会場：国立女性教育会館
- ③担当：荒谷美智会員、石川稚佳子理事、中山榮子理事、宮本霧子理事、大倉多美子監事

- ◆2019年度子ども科学教室への共催◆

- ①開催日：2019年8月3日(土)、10月3日(土)、2020年2月
- ②会場：佐世保市少年科学館
- ③担当：中国・四国・九州・沖縄ブロック
(小川由起子理事)

④内容：「夏のさわやかバスタイム～バスボムづくり～」

- ◆第16回男女共同参画学協会連絡会シンポジウムへの参加◆※台風のためWeb上での開催

開催日：2019年10月12日(土)

- ◆国際婦人年連絡会活動◆

- ①国際婦人年連絡会2019年度第2回全体会議

日時：2019年11月20日(日)

場所：東京YMCA会館2階

SJWS参加者：大倉多美子監事、宮本霧子監事、
石川稚佳子理事

【2020NGO日本女性大会開催準備】

日時：2020年11月8日(日)

会場：昭和大学上条記念館大会議室「赤松」

開催テーマ：「私たちは黙らない」

女性の権利を国際水準に」

実行委員長：大倉多美子監事

- ②「ネオニコチノイド系農薬・殺虫剤の使用禁止を
求める要望書」を手渡し

日時：2019年3月12日、6月20日

場所：農林水産省、環境省

SJWS参加者：大倉多美子監事、宮本霧子監事

- ③国際婦人年連絡会分野別委員会環境委員会開催
(座長：宮本霧子監事)

日時：2019年6月6日(木)、7月10日(木)、9月4日(木)、
10月10日(木)、11月21日(木)、12月19日(木)、
2020年1月23日(金)、2月21日(金)

場所：紀尾井町ビル3階

SJWS参加者：大倉多美子監事、宮本霧子監事、
石川稚佳子理事

- ④CSW64国連派遣：中止

- ⑤環境委員会主催セミナー：延期

- ◆クォーター制を推進する会(略称「Qの会」)の活動
について◆

- ①ロビー活動を継続している
- ②担当：大倉多美子監事、浜田恵美子理事
- ③毎年4月10日は女性参政権行使記念日

6. 外部団体事業への後援高等学校での講演

【2020年度事業計画】

1. SJWS主要会議の開催予定
 2. 出版活動
・NEWS127号・128号合併号の発行。
・日本女性科学者の会学術誌第21号(電子版)の刊行
 3. 奨励賞・功労賞の贈呈
 4. SJWS主催事業：
・学術大会2020年9月予定
・新春学術シンポジウム
 5. SJWS参画事業への参加
◆女子中高校生夏の学校◆
◆2020年度子ども科学教室への共催◆
◆日中韓リーダーズフォーラム◆
開催日：2020年 会場：未定
◆第18回男女共同参画学協会連絡会シンポジウム◆
◆2020NGO日本女性大会◆
 6. 外部団体事業への後援
 7. ブロック活動
 8. 理事選挙2021年2月頃
- ※詳細は、会員専用HPに掲載しています。

編集：玉井幸恵・小川美香子・小杉尚子・廣瀬理沙

発行所：一般社団法人日本女性科学者の会 ©

事務局：〒226-8501 神奈川県横浜市緑区長津田町4259 東京工業大学 生命理工学院 近藤研究室内
TEL/FAX 045-924-5800 E-mail: sjws-office@sjws.info